

サーチライト With Pastor Jon 黙示録 18 章 パート 1

このメッセージはアップルゲート クリスチャン フェローシップの、ジョン・コースン牧師が公開したメッセージを、アメリカ在住の日本人クリスチャン木下言波が翻訳して YOUTUBE やブログに上げたものを文字化したものです。世界的なインターネット規制が始まろうとしています。私達はその日のために、文字にして紙に記録するのを感じました。また、インターネットに不慣れな方や字幕を追って読むのが困難な方のためにも必要があると主に迫られたと感じます。

※インターネットのメッセージを、文章化するこの働きを始めた姉妹が、現在目を患って治療中です。どうか、りょくさんの為にも、お祈りください。

「きょう、もし御声を聞くならば、あなたがたの心をかたくなにはならない。」ヘブル 4 : 7

メッセージ by ジョン・コースン牧師 アップルゲート クリスチャン フェローシップ

<http://joncourson.com/>

7590 Highway 238 Jacksonville, OR 97530

訳 by 木下言波 DivineUS : <https://www.youtube.com/user/TheDivineUs>

筆記 by Rin

ここまで読んできて、混乱している人もいるでしょう。ここでまたバビロンが登場することに、戸惑っている人がいるかもしれません。

黙示録 17 章でバビロンが滅ぼされ、焼き尽くされたのを見たばかりなのに、この 18 章でまた何度も何度も登場して、そして再び滅ぼされようとしています。

ここまで通して読んできた人、学んできた人には、少し紛らわしいかもしれません。

これは一体どういうことなのでしょう。

注目すべきは、17 章と 18 章のバビロンは、それぞれ二つの異なる実体であるという事。

17 章は比喩的な意味のバビロンで宗教組織、偽宗教システム、秘められたバビロンと呼ばれています。

前回の学びでお話したように、バビロンは歴史を通して、全ての偽宗教の中心でした。だから 17 章は、比喩、象徴としての霊的バビロンで、その本部が 7 つの丘と呼ばれる町に置かれます。それが、ローマ。しかし 18 章では、象徴的なバビロンではなく、実在する町なのです。宗教組織ではなく、実在の町で、経済的なバビロンです。

17 章は宗教組織としてのバビロン、18 章は政治的、経済的な意味のバビロン。

その違いは、二つを比べてみると明瞭で、17 章のバビロンは、地上の王たちに嫌われています。17:16 に王たちは彼女を憎み、焼き尽くしたとあります。

ところが、18 章の経済的なバビロンは、王たちに愛されたのです。

彼女と不品行を行い、好色にふけた地上の王たちは、彼女が火で焼かれる煙を見ると、彼女のことで泣き、悲しみます。(黙示録 18:9)

だから、この二つは別物なのです。

王たちは、17章で宗教組織を憎み、18章では経済の町を愛しました。

また読んでいくと、この二つが異なる実体であることが分かります。

18章はこのように始まっています。

この後、(黙示録 18:1)

何の後？ 17章の宗教的バビロン滅亡の後です。

あらゆる宗派から本当の信者が天に挙げられた後、残された者たちは一致して偽宗教組織を創り、ローマに本部を置きます。携挙の後形成される宗教組織。

初めは、反キリスト及び10か国から成るヨーロッパ連合と手を組み、共に働いているように見えますが、最終的には、反キリストとこれらの王たちは背を向けて、これを焼き尽くします。宗教組織は、反キリストと復活したローマ帝国、即ちヨーロッパ連合の手によって崩されます。

反キリストとヨーロッパ連合の指導者たちが、世界を支配し権力を得るという目的を果たすために、宗教組織を利用するだけ利用して捨ててしまい破滅させる。利用し、酷使し、そして捨てる。その通りのことが起こります。

だから17章で“大淫婦”と呼ばれているのです。

そして、18章へ続いていきます。

バビロンは偽宗教の起源だけではなく、世界貿易の起源でもあるのです。

バベルの塔。人々は一致団結し、共同作業のために、その頂が天に届く塔を建て上げるために、自分たちの名を知らしめるために、至る所から集まり(創世記 11:4)、シヌアルの地に定住し始めました。(創世記 11:2) こうしてバビロンは、宗教的一致だけではなく、政治的な提携や経済的試みの起源となりました。なので、18章のバビロンは宗教的側面ではなく、経済的な側面を持つバビロンです。

では、熟考すべき興味深い事として、ヨハネが語っている18章のバビロンは、文字通り実在するイラクのバビロンなのでしょうか？

バビロンはバグダッドから約80kmの所に位置し、サダム・フセインが権力を握るまでは、どちらかと言えば、何世紀にもわたって放置されてきたような所でした。

ところで、サダム・フセインの英雄がネブカデネザルだった、と知っていましたか？

事実、フセインは硬貨の片面に自分の肖像を、もう片面にネブカデネザルの肖像を入れていたほど、ネブカデネザルは彼のヒーローでした。

なぜかと言うと、ネブカデネザルは、現在のイラクのバビロンでユダヤ人を抑え、イスラエルを支配した最後の王だったからです。

ネブカデネザルは、巨大な像を建てました。(ダニエル書 3章) 彼が眺めている栄華に満ちた町は、巨大な二つの城壁に囲まれており、その幅は広大で、壁の上に6台の戦車が置けるほどでした。(ダニエル書 4章) この町の栄華や豪華さの詳細を全てお話することはできませんが、バビロンの空中庭園は古代の

7 不思議の一つです。

バビロンの王ネブカデネザルは、自分の町の豪華さ、美しい造りを眺めて言いました。

「この大バビロンは、私の権力によって、王の家とするために、また、私の威光を輝かすために、私が建てたものではないか。」(ダニエル書 4:20)

その後何が起こりましたか？ 彼は7年間、獣のようになりました。

7…不思議な数字ですね。

驚くほどの富と美、輝く建造物、洗練された町、バビロン。まさに世界の“絶景”でした。しかし、それが滅ぼされます。

イザヤ書の、バビロンが滅ぼされる箇所について読みましょう。

こうして、王国の誉れ、カルデヤ人の誇らかな栄えであるバビロンは、神がソドム、ゴモラを滅ぼした時のようになる。(イザヤ書 13:19)

そこには永久に住む者もなく、代々にわたり、住みつく者もなく、アラビヤ人も、そこには天幕を張らず、牧者たちも、そこには群れを伏させない。(イザヤ書 13:20)

そこには荒野の獣が伏し、その家々にはみみずくが満ち、そこにはだちょうが住み、野やぎがそこにとびはねる。(イザヤ書 13:21)

山犬は、そののとりで、ジャッカルは、豪華な宮殿で、ほえかわす。

その時の来るのは近く、その日はもう延ばされない。(イザヤ書 13:22)

次にエレミヤ書 51 章。ここでもバビロンについて、非常に直接的に語られています。

わたしはバビロンとカルデヤの全住民に、彼らがシオンで行ったすべての悪のために、あなたがたの目の前で報復する。—主の御告げ— (エレミヤ書 51:24)

見よ。わたしはおまえを攻める。—主の御告げ—わたしはおまえに手を伸べ、おまえを岩から突き落とし、おまえを焼け山とする。(エレミヤ書 51:25)

だれもおまえから石を取って、隅の石とする者はなく、礎の石とする者もない。

おまえは永遠に荒れ果てる。—主の御告げ— (エレミヤ書 51:26)

なぜわざわざ時間を取って読んだかと言うと、イザヤとエレミヤの二人の預言者が、主の霊に満たされて言っているからです。「バビロンはソドムとゴモラのようになる。」「地図の上から消え失せ、滅ぼされ、燃え尽きる。」「牧者さえもその群れを伏せさせない。」

「ただ荒野の獣や鳥の住みかとなる。」「永遠に廢れる。」

そこで興味を持つのは、この預言は成就されたのかということ。

これには大きな議論がなされていて、ある人は「バビロンを見ると…メディア人やペルシャ人が攻め、何世紀も過ぎて何もなくなつた。」と言います。事実です。

しかし、確かにネブカデネザル時代のような輝かしい町ではなくなりましたが、それでもバビロン地域には常に居住者がいて、小さな集落が絶えず存在していました。

そこへサダム・フセインが権力を持ち、15 - 16 年前 (*1997 年収録) 優秀な日本人建築家チームを結成して、イラクに招きました。何をしたと思いますか？

ネブカデネザルに憑りつかれたサダム・フセインは、バビロンを再建したのです。

“ネブカデネザルの宮殿”は再建され、“イシュタル門”も完成し、城壁も概ね完成。

その目的は、訪問者にとって非常に大きな意味を持つエルサレムのように、バビロンの歴史に霊的に影響を受けた人たちが訪れる場所にあること。

更に政治的には、アラブ諸国、最終的に可能であれば世界の中心地にあることでした。

これが、18章に出てくるバビロンなののでしょうか？ ともかく18章に戻りましょう。

この後、私は、もうひとりの御使いが、大きな権威を帯びて、天から下って来るのを見た。地はその栄光のために明るくなった。(黙示録 18:1)

彼は力強い声で叫んで言った。

「倒れた。大バビロンが倒れた。そして、悪霊の住まい、あらゆる汚れた霊どもの巣くつ、あらゆる汚れた、憎むべき鳥どもの巣くつとなった。(黙示録 18:2)

それは、すべての国々の民が、あっ、ヒントが出てきました。

それは、すべての国々の民が、彼女の不品行に対する激しい御怒りのぶどう酒を飲み、地上の王たちは、彼女と不品行を行い、地上の商人たちは、彼女の極度の好色によって富を得たからである。」(黙示録 18:3)

つまり相互作用、商業的取引によって、全世界を巻き込む不品行が行われており、全ての国々がバビロンと関係を持ち、その影響を受け、依存しています。

それから、私は、天からのもう一つの声がこう言うのを聞いた。

「わが民よ。この女から離れなさい。その罪にあずからないため、また、その災害を受けないためです。(黙示録 18:4)

なぜなら、彼女の罪は積み重なって天にまで届き、神は彼女の不正を覚えておられるからです。(黙示録 18:5)

天からの声が語りかけているのは、患難の中でクリスチャンになった人たち。

教会は既に天に挙げられています、主は、まだ魂を救い続けており、患難時代には非常に多くの、膨大な数の人々がようやく理解して信じ改心します。

そしてここで、ハッキリと告げる声が天から聞こえてきます。「バビロンから離れなさい。」「そこから出なさい。」「彼女と関わってはいけません。」

あなた方は、彼女が支払ったものをそのまま彼女に返し、彼女の行いに応じて二倍にして戻しなさい。

彼女が混ぜ合わせた杯の中には、彼女のために二倍の量を混ぜ合わせなさい。(黙示録 18:6)

彼女が自分を誇り、好色にふけったと同じだけの苦しみと悲しみとを、彼女に与えなさい。(黙示録 18:7)

彼女はどれほど自分を高め、おいしい思いをしてきたことか。なので、それと同じだけの苦しみと悲しみを彼女に与えるのです。

彼女は心の中で『私は女王の座に着いている者であり、やもめではないから、悲しみを知らない』と言うからです。(黙示録 18:7)

バビロンは全ての国々と取引をし、全ての国々と不品行で交わり、「私はやもめじゃなくて女王だ。」と言っています。「女王よ!」「貧しくないし、何でも持っているわ。」そして、「悲しみを知らない」と言うのです。面白いですね。

「悲しみが無い」のではなく、「悲しみを知らない」即ち、「悲しみを知ろうとしない」

どういうことかと言うと、そう、マリー・アントワネット。

フランス革命で何が起きたでしょう。家臣たちがマリー・アントワネットに、「人々がとても苦しんでいます。パリ中どこにもパンがありません。」と言うと、彼女は取り付く島もなく言うのです。「パンがなければケーキを食べればいいじゃない!」

マリーは要点をすっかり見落として、パリの宮殿で人々に共感せず、「悲しみを知らなかった。」

それが発端となって、結果的にはフランス革命になりました。

彼女は悲しみを知らず、バビロンもまた「私は欠乏を知らない」と言うのです。

バビロンは、自身の好色、物質主義、経済に余りにも浸り過ぎて、自分の領域でさえ人々の悲しみを知ろうとしないのです。

「なら、ケーキを食べればいいじゃない。」「何も問題はないじゃない。」

そのため神は言われました。

それゆえ一日のうちに、さまざまの災害、すなわち死病、悲しみ、飢えが彼女を襲い、彼女は火で焼き尽くされます。

彼女をさばく神である主は力の強い方だからです。(黙示録 18:8)

バビロンは焼かれます。

神は「あなたは、自分は女王で悲しみを知らないと言うが、わたしはそうは見えていない。」

彼女と不品行を行い、好色にふけた地上の王たちは、彼女が火で焼かれる煙を見ると、彼女のことで泣き、悲しみます。(黙示録 18:9)

彼らは、彼女の苦しみを恐れたために、遠く離れて立っていて(黙示録 18:10)

地上の王たちは、バビロンが焼かれるのと同じ火で焼かれたくないため、離れた所に立っています。しかし彼らは、それまで共に好色にふけていました。それが、嘆き、悲しみ、遠く離れて言うのです。

『わざわいが来た。わざわいが来た。大きな都よ。力強い都、バビロンよ。あなたのさばきは、一瞬のうちに来た。』(黙示録 18:10)

この「一瞬の内に」というフレーズは、何度も何度も出てきます。

が、これはヨハネの時代には、想像もつかない、不合理の狂った考えでした。大きな町が一瞬の内に崩壊するなんて不可能だったのです。

ヨハネの立場になって考えてみて下さい。この情景を見ながら、ヨハネはぶっ飛んだことでしょう。

想像を絶する富と力、煌びやかさを備えた都市が一瞬の内に燃え尽き、それを見ている人々は、その火で自分が焼かれるといけないからそばには近付きません。

時々、150年前、100年前の人々が書いている古いコメンタリーバイブルを読む機会に恵まれるのですが、これがすごく面白いのです。その時代でも、大都市が一瞬の内に焼き尽くされ、破壊されることは

理解できず、「我々には理解できない。ヨハネは絶対にたとえ話をしているのだ。都市が一瞬の内に破壊されるなんてあり得ない。」

勿論、私たちは言いますよ。「問題ない」と。私たちは核兵器の時代に生きていて、それを以てすれば、一瞬の内に都市、国、世界を滅ぼすことができます。

そして原爆が投下され荒廃した地域周辺では、「我々はその近付かない。影響を受けるといけないから。」「ここでテレビの前において、報道されるのを見ていよう。」「あそこには行かない。私たちも災いを受けるといけないから。」

また、地上の商人たちは彼女のことで泣き悲しみます。もはや彼らの商品を買う者がだれもいないからです。(黙示録 18:11)

彼らはバビロンの人々を思って嘆くのではなく、「バビロン崩壊によって世界経済が終わってしまった!」「世界経済が崩壊した!」

ここの描写を見て下さい。まるで巨大な“サックス 5th アヴェニュー”、デパートの売り場です。商人たちが嘆きますが、その理由を見て下さい。

デパートの1階は貴金属フロア。商品とは金、銀、宝石、真珠(黙示録 18:12)

Oh,no! 貴金属売り場が消滅した。

次の売り場へ行くと、衣料品フロアです。麻布、紫布、絹、緋布(黙示録 18:12)

そして次は家具とキッチン用品のフロア。香木(黙示録 18:12)

これは、良い家具に使われます。(桐のタンス?)

さまざまな象牙細工、高価な木や銅や鉄や大理石で造ったあらゆる種類の器具(黙示録 18:12)

これらは全部、家具インテリアやキッチン用品。高価な銀食器。

次、4階。化粧品とスパイスのフロア。肉桂、香料、香、乳香(黙示録 18:13)

香りを付けるためのもの。

このような売り場が、次から次へと消えて失くなっていきます。

次は高級食品、グルメのフロア。ぶどう酒、オリーブ油、麦粉、麦、牛、羊(黙示録 18:13)

ここに挙げられている食品は、全て高級の絶品で、食道楽に使われる物ばかりです。

では6階に向かいます。こちらは車のフロア。それに馬、車(黙示録 18:13)

商人たちは、「Oh,no! 馬や車が!!!」「ブロンコ・マスタングが一!!!!」「何と言うことだ…」そう言って嘆き、信じる事ができません。

経済が破綻し、全世界がその影響を受けます。

そして地下。地下のフロアには、奴隷(黙示録 18:13) もっと正確に言うと「肉体」

また、人のいのちです>(*人の靈魂(文語訳))(黙示録 18:13)

アダルト商品。

全てのものが崩れ去ります。けれどもここで見て欲しいのは、この中に生活必需品はなく、全てが贅沢品であること。留まる場所を知らない、過熱した物質主義、快樂主義、肉欲主義。分別を欠いた買い物如山。

ここに挙げられている物の中には、ヨハネの時代、日々の生活に必要な一般的な物は何ひとつなく、これらは全て贅沢品です。そんなバビロンが完全に崩れ落ちます。

また、あなたの心の望みである、熟したくだものは、あなたから遠ざかってしまい、あらゆるはでな物、はなやかな物は消えうせて、もはや、決してそれらの物を見いだすことができません。

(黙示録 18:14)

これらの物を商って彼女から富を得ていた商人たちは、(黙示録 18:15)

バビロンから商品を輸入していた者、またバビロンへ輸出していた者たちは、

彼女の苦しみを恐れたために、遠く離れて立っていて、泣き悲しんで、(黙示録 18:15)

言います。『わざわいが来た。わざわいが来た。麻布、紫布、緋布を着て、金、宝石、真珠を飾りにしていた大きな都よ。(黙示録 18:16)

あれほどの富が、一瞬のうちに荒れすたれてしまった。』

また、すべての船長、すべての船客、水夫、海で働く者たちも、遠く離れて立っていて、(黙示録 18:17)

彼女が焼かれる煙を見て、叫んで言いました。『このすばらしい都のような所がほかにあろうか。』(黙示録 18:18)

因みに湾岸戦争の時、この再建中のバビロンは、全軍の立ち入りが禁じられ、我々の軍も湾岸戦争の連合国も、そこでの一切の軍事行動が禁止されました。

その場所は、我が国のシュワルツコフ軍司令官とコリン・パウエルと当局によって、「再建されたバビロンには、何があっても指一本触れてはならない。」と、完全に立ち入り禁止にされたのです。

とても興味深い話です。それから、恐れたサダム・フセインがバグダッドを離れてバビロンに隠れた、という報告もあったようです。それで、もしフセインがバビロンに逃れた場合、我々は追うべきかどうかで、大きな議論が起こった、という情報が出回ったりしましたが、その出所が信頼できるかどうかは、私には分かりません。興味深いけど私には分かりません。

ただ私が知っているのは、アメリカ軍は、再建されたバビロンへの攻撃を禁じられていたということです。

問題は、この 18 章のバビロンが、本当にイラクのバビロンなのかということ。

その理由はここ。船長や人々が、海の上から燃えるバビロンを見ているのです。

イラクのバビロンは、どの海からも見ることはできず、これは成り立たないように思えます。バビロンは内陸で、港町ではありません。

つづく

あなたは世も世にあるものも、愛してはいけません。もしだれかが世を愛しているなら、その人のうちに御父の愛はありません。すべて世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢は、御父から出るものではなく、世から出るものだからです。

世と、世の欲は過ぎ去ります。しかし、神のみこころを行う者は永遠に生き続けます。

(Iヨハネ 2:15 - 17 新改訳 2017)